

中信各地から大勢の新採用職員の皆さんにお集まりいただきまして、ありがとうございます。2日間の研修ですが、スタートは、私、池田町町長の甕でございます。講話ということで、研修をさせていただきます。

若干の自己紹介をいたしますけれども、甕（もたい）という名字は、変わっていますよね。中信ではそれほど珍しくないのですが、安曇野市の三郷が発祥ではないかといわれております。三郷地域に行きますと、この字を使った名字がたくさんある。全国へ行きますと、ほとんどの方は読めないという変わった名字ですが、1回読めば忘れないということで、相手はよく覚えてくれるのですが、こちらはよく覚えられないということになっております。そのような甕という姓でございます。

私は、議員生活を3期12年務めまして、4期めの1年めで議員を辞めて、町長に立候補したわけです。実は前町長がうちの前に住んでおりまして、3期めに挑戦ということで取り組んでいたのですが、その町長さんが不祥事を起こしまして、全国的なニュースになりましたが、突然の辞職ということで、きゅうきょ私が、「だったら」ということで立候補させていただきました。ですから、前の町長さんがしっかりやってくれば、私がこの場に立つこともないし、この職をいただくこともなかった。大先輩ですので、代わりに町長に出ることはかなわぬ世界でした。しかし、人生は分からないもので、突然降って湧いたような不祥事が起こりまして、それによって私が立候補させていただいて、当選させていただいたわけです。

皆さんとは、そのようなところが違いますね。皆さん方は、就職試験をやって、いろいろな関門を乗り越えて採用というところに来たのですが、私たちは住民の選挙によるものですから、任期が決まっております。4年の間に実績がないと、その次の場はないことになってしまうわけです。しかし、皆さんは、1回採用されれば公務員は、はっきり言って首になることはない。非常に安定した職場。われわれから見ると、そのような意味では、本当にいい職場だと思います。しっかりと人生設計ができるのではないですか、皆さん。不祥事を起こさなければ。われわれは、そのような点でいくと、大変厳しい。4年間で実績がないと、次の人が虎視眈々と狙っておりますので、次の選挙で敗れば、ただの人になってしまいます。そのような意味では、毎日が緊張感というところもあるかと思います。そのようなところもご理解いただきまして、今日の研修の一端になっていただければと思います。

レジュメを用意させていただきました。テーマは「行政職員としての在り方と自覚」と書かせていただきましたけれども、皆さんも聞いたことがあると思いますが、「人生は自覚によって成る」といわれております。これは、公務員ばかりではありません。仕事においても、自分は何なのか、何のために仕事をしているのか。自分の生きている場をしっかりと自覚しなければ、なかなかうまく人生が回っていかないことになります。しかも、自分の力を発揮できないということにつながってしまいますので、自分は公務員であるという自覚を、この2日間を通して、しっかりと身につけていただけたらと思います。

行政の仕事ということで書いてありますけれども、一般企業ととかく比較されますが、生産性を求めるものではありません。住民の福祉に資することになっております。住民の皆さんが、いかに暮らしよく生活できるか。そのような場を築いていくことが、行政の仕事です。生活しにくいということになると、「そこを何とか改善してくれ」と、これから住民の皆さんから盛んに言われてくるようになると思います。そのようなところから考えますと、住民の皆さんが相手になりますし、住んでいる地域そのものが皆さんの働く場になって、役所の中だけではない、地域全体が皆さんの仕事場になるわけです。相手は住民です。一般企業からいきますと、お客様になるわけです。生産性を求める仕事ではないということになりますと、サービス業になりますので、行政は、徹底したサービス業になるわけです。そのような気持ちをしっかり持つ。皆さんもそうですが、はっきり言えば、皆さんの給料は全て税金で賄われていくわけですので、住民の皆さんの納めていただいた税金のおかげで、皆さんは給料を頂ける。これを決して忘れてはならないと思っております。

逆に言うと、一般企業を志した人にとっては歯がゆいのです。自分が努力しても稼ぐことができないから、行政は。一般の企業は、一所懸命自分が努力して稼げば、その分、報酬として上乗せができるわけです。あるいは会社が発展すれば、それだけ収入が多くなるわけですから、やりがいがあるという点では、行政と違う面がある。そのような面では、行政の喜びとは何かということになると、やはり住民の皆さんに喜んでいただくということが、一番の目指すところになってくるのではないかと。それが、イコール自分たちの働く喜びにつながっていくのではないかと思います。

そのようなことを前提にいたしまして、その下に「地域を知る」と書かせていただきました。皆さんの働くプラットフォームは地域ですので、地域を知らなければ、自分たちの働きは満足にできないわけです。そのような意味では、大いに自分たちの地域を知ってください。先ほど司会の方から、池田町の紹介がありました。皆さんは、皆さんの地域を知っていますか。知っているようで知らないのではないですか。大いにこれから学んでいただきたいと思っております。

皆さんは、それぞれの市町村の住民であるとともに、長野県人です。では、長野県のことを知っているかということになるわけですが、長野県には行政が幾つありますか、自治体は。77と知っていますか。本当かな。今、初めて聞いたという顔をしている人がいますね。では、市は幾つありますか。市が19です。では、町は幾つだろう。町は23、村が35と、これで77になります。

日本の県の中で、村が一番多い所は、どこか分かりますか。知っている人。誰も知らない。私も最近聞いたばかりなのだけれども、村が一番多い所は北海道。長野県が2番めなのですが、なぜ長野県は、これだけ自治体が多いのか。77の自治体は、本当に多いのです。それはなぜかという、平成の大合併によって他の県では相当な数が減った所がありますが、長野県は、時の田中知事が合併反対派で、地域を大切に、地域を守るとい

うことで、どんなに小さな村・町でも守るということで合併に反対したわけです。そのおかげで、村が多く残った。平谷村は、人口は400人そこそこではないですか。500人台もいるし、700人台も、北相木村は740人ほどしかいませんからね。一つの自治体で400人、500人、600人、700人という、そのような村が長野県にはあることを、皆さんも知っておいてもらわなければいけない。

長野県はみんな山の中なので、これを一つにすることも非常に大変なのです。相当力のある自治体があればいいけれども。飯田市などは力がありますから、近隣の小さな所を若干合併しましたが、それでもほとんどが残っていますね。長野県は、合併を推進しなかったために、これだけ多くの自治体が残っているということです。岐阜や新潟は合併推進派の知事さんだったので、みんなくっついてしまって、本当に少なくなりました。

自治体は、首長の独壇場なのです、はっきり言えば。最終的には首長が決めていく。首長が「こうしたい、ああしたい」ということが、実現できる。その最たるものは、どこですか。東京都です。十数兆円の予算を持っていて、やりたい放題にやるではないですか。ですから、総理大臣よりも面白い、逆に言うと。そのようなことで、石原慎太郎知事は、水を得た魚のように東京都の知事を務めました。そのくらい面白いということで考えますと、自治体の首長は、その地域をしっかりと進めていく責任と、逆に自分の思いを実現できる可能性が非常にあります。そのような力のある立場なのだということです。

私も議員を3期もやってくると、議員というものは、わあわあ言うだけで、何も自分たちの思いを遂げることができないのです。「あそこがいけない、ここがいけない」と行政のことをつくだけで。それを改革していくのは行政の方なので、行政がリードして、しっかり町づくりをしていく、村づくりをしていく、市づくりをしていくことになっていくわけです。そのような点では、大変面白い仕事だと思います。行政出身の首長さんは非常に多いのです。行政が分かってくると、自分の思いが強くなれば、「こういう町づくりをしたい」「こういう市づくりをしたい」という気持ちが高まってくると、首長になってやりたいという思いになってくるのかと思います。ぜひ行政の勉強をしっかりといただいて、挑戦してもらえれば、大変面白い仕事だと私は思いますので、お薦めしておきます。

そのようなことで、地域を知る。そして、地域に入っていく。今、池田町では、それぞれの名称は違いますけれども、「区」と言ったり、「自治会」と言ったり、地域の集落があります。そこに、パートナーとして職員が入っていく制度を設けております。地域に入ってから、地域のことをいろいろと知って、地域の困ったことや行政に対する要望などを吸い上げていこうという制度でやっておりますが、そのようないろいろな仕組みを作りながら住民の皆さんの声を聞いていくことが、非常に大事な仕事になってくるわけです。それを考えますと、地域で聞いた声を、本来であればどんどん上に上げていただいて、行政として対応を考えていかなければいけないと思います。

地域を知ることから、地域に溶け込む。いろいろな地域での催し物がありますね。イベントや、お掃除の日などがあるわけですが、皆さんには大いに出てもらいたいと思

います。皆さんがどのように思っているかは分かりませんが、地域の皆さんは、役場の職員が参加したかどうかを非常に気にしています。必ず「あいつ来たぞ」「こいつ来たぞ」と、顔は分かっていますから、数えるわけです。「あいつは一回も来ないな」と。そのようなことを考えますと、皆さんにとっては仕事外の時間ではありますけれども、そのように地域の皆さんとなじんでいく、知っていく。それが、自分たちの仕事に非常に役に立つわけです。そして、逆に信頼されてきます。「よく顔を出してくれるな、あいつは。じゃあ、いろいろとまた相談してみよう」と。相談をすると、本当の地域の皆さんの声が聞こえる。行政は福祉に資するのですから、皆さんの住みよい環境づくりをそのような話を通してつかまえて、変えていくことが、大事なポイントになってくると思います。

ぜひ皆さん、地域を知ってください。まずは歴史・文化・伝統などを知って、自分たちの地域が、長野県の中でどのような位置にあるのか。もう一つ、長野県がなぜこのように集まって一つの県になったか、この勉強もしてください。長野県人は、外に行くと必ず「信濃の国」を歌うと言いますけれども、なぜか。地域がみんなばらばらで、文化が違うのです。大ざっぱに分けて四つといわれておりますが、文化の違う人たちが一つの県を作ったものだから、行き会っても風習も違うし、考え方も違う。ですから、なかなか一つの意見に統一されない。気持ちを一つにするために、「信濃の国」という県歌を作って、外に行ったときも、この歌を歌えばみんな一つに気持ちになる。ですから、長野県人だけです。外に行って長野県人が集まると、「信濃の国」をすぐ歌いだすといわれる。

皆さんは、もう歌わないかな。知っていますか、「信濃の国」を。知らない人？ ああ、知らない。昔は、学校で教えられたそうです。私も長野県で育った者ではないものですから、知らないですけれども、子供の頃から歌われて、ある程度の年齢以上の人はずっかり覚えておりますが、そのように心を一つにした。いわゆるなぜかという歴史があるのです。「十州の」といわれるように、余った所をみんな集めて、山の中だけを一つの県にまとめてしまった、廃藩置県の時に。ですから、全て山で仕切られているものだから、山を越えると文化が違う。言葉が変わるでしょう。飯田と長野では言葉が違うし、中信地区も、今でこそだいぶ標準語化されてきましたが、昔は通じないくらい違いがあったようです。そのような中で一つの長野県が作られてきているということも、大いに勉強していただきたい。長野県の県庁をどこにするかということで、松本と長野が争って、長野市に県庁を持っていった。「じゃあ、松本には大学をよこせ」ということで、信州大学ができた。そのような歴史もあったようですが、その中で自分たちの地域は、このような歴史のもとで作られたのだということを知っていくと、地域に対する愛着や愛情が必ず生まれてきます。

これからあちらこちらに行ったときに、聞かれるわけです。「松本市の特徴は」「どうですか、安曇野市は」と。池田町を知っている人は、あまりいないのです。池田町を知らない人？ ああ、知らない人がいた。ありがとうございます。今日、知っていただいたと思います。県外に出ると、ほとんど知らない。県内でも77も市町村がありますから、知らない人が非常に多いのですが、特に県外に出れば、池田町なんて、全く知られていないので

す。

しかし、池田町には、絶対的に全国で知らない人がいないものがあります。それは何か知っていますか。「てるてる坊主の里」と言われているのですけれども、なぜてるてる坊主の里か。「てるてる坊主」の歌を知らない人はいる？「てるてる坊主 てる坊主 あした天気にしておくれ」と。知っているでしょう、皆さん。全国民が知っている歌です。その発祥の地が池田町。せっかくの機会だから、池田町を知ってもらわなければいけませんからね。これは池田町しかないのです。

なぜ発祥の地になっているのかというと、「てるてる坊主」の作詞家の浅原六朗という人の生誕地です。浅原六朗という人が池田町で生まれて、全国のあちらこちらに行きながら、約六十数年ぶりに池田町に帰ってきた。そのときに、松本市から池田町の方に向かって、「あした、いよいよ生まれたふるさとに帰る時だ。何とか天気にしてほしい」という願いを込めてこの歌を作詞したことが発祥です。そして、翌日に池田町に行ったら、温かく歓迎してもらえたということで、「池田町がふるさとだ」と大変喜ばれた。そのようないきさつの中で生まれた歌だということを、私も教えられて分かったわけなので、皆さんも、恐らく地域に行けば、それぞれの市町村の中でいろいろな物語があると思います。そのようなものを知って、外に行ったときに少しそのような話をすると、ぐっと興味を示してくれることにつながっていくだろうと思います。そのようなことで、地域を知るということでの話をさせていただきました。

それから、その下に一般企業との違いが書かれてありますが、先ほどお話ししましたように、皆さんの給料の財源は、住民の税金。常に一般企業と比較して見られているという、非常に厳しい状況です。本当に地域の皆さんは、そのような目で見ます。ですから、いつもクレームがつくことは、「役場の職員は」と頭に来るのです。そして、「どうだ、こうだ」という話。一般企業は、そのようなことを言われられないでしょう。「あそこの会社の営業はどうだ」など、そのようなことは町のうわさにはなりません。しかし、行政の職員は、ひとたび住民から声が出ると、あちらこちらでそのような話が出てしまうということですね。

そして、自分で稼ぐことができない。私も一般企業から来ましたので、行政に入ってみて、本当に難しいなど。与えられた収入だけでやりくりをすることが、行政の仕事。足りなければ、「どこかへ行って稼いでこい」と普通の企業はやるのです。どうもこのままでは収入が少ない。「じゃあ、手を打て」ということで、「ここに営業展開して売っていきましょう」、あるいは「こういうものを作って売りましょう」という発想が出るのですけれども、行政はできません。与えられた費用の中でやりくりをするしかないという、一面では非常に厳しい。入るものは決まってしまうから、出るものを制限せざるをえないことになるわけです。

唯一できることは、ふるさと納税。私は、これに非常に希望を持ちました。行政で今までにない、初めて自分たちの努力で収入を得ることができる、唯一稼ぐことができる事業だということで、非常にいい発想をしてくれたと思ったのですが、後でまた紹介しますけ

れども、エスカレートして、今、いかがですか。一番稼いだ静岡の小山町は、百四十数億をふるさと納税で集めた。それを見て、大阪の泉佐野市が135億。皆さん、自治体の予算規模は分かっていますね。池田町の予算が今年度は50億ですから、130億集めれば、やりたい放題。自分たちの1年間の予算の2.何倍ですから、大変な金を集めた。それが問題で、そのような自治体は、交付税といって国から不足の所にお金を出してくれるのですが、そのようなものを全部カットしてしまおうという法律ができようとしております。

しかし、自治体からすれば羨ましい限りで、住民の皆さんからいろいろな要望が上がってくる。それを満たすためには予算を使ってやるわけですから、その予算がなければ、どこからお金を持ってくるのかといってもないわけですから、借り入れるしかない。起債と言うのですけれども、借金をするにも限度があるし、あまり借金をすると、議会からすぐつかれる。ですから、なかなか借金も思うようにできない。本当に苦しい立場なのが、行政の理事者ということになるわけです。そのような中で、どんと寄附金が何十億も集まれば、あれもできる、これもできると、住民の皆さんの要望に全て応えることができるようになってくるわけです。そのようなことで、ふるさと納税は本当に稼げる。これからも制度は残っていくと思いますが、堅実にやっていくことが大事かと思えます。

それから、よく企業の方から言われることは、「行政マンはいいよな」と。ノルマがない、責任がない、首を切られない。ノルマがない、皆さん、分かりますか？ 自分たちが与えられた仕事のノルマはありますけれども、一般企業は、常に売り上げと利益のノルマを課されるわけです。それに向かって、皆さんやるわけです。そして、幾らかでも利益を上げて、それを税金として社会に還元していく。社会のためにということで、どんどん下がっていくと、目の前にノルマが与えられていくわけです。それが達成できないと、はっきり言えば、賞与に影響することになってくるわけです。皆さんは、どれだけ仕事をしくじっても、ノルマが達成できなくても、賞与が減らされることはないでしょう。人事院勧告で一律に決められて、その基準に従って、若干の違いはありますが、行政によって決められていく。

今、それぞれ総合計画が作られていると思います。池田町でも第6次総合計画がスタートいたしました。第5次総合計画を検証しました。「達成率は70%です」と、それだけです。では、30%達成できないことは誰が責任を取るのかということ、誰も取らない。突き詰めていくと首長が取られるということが、行政の仕事です。職員の皆さんは、決してその責任を追及されることがありませんから、「この次は達成できるようにしましょうね」で終わりますけれども、一般企業は、そのようなことでは済まない。非常に厳しく、達成できないときにはどうするかという責任を問われるということに、それぞれがなっていくわけです。そのような点でいきますと、非常に安定した、いい職場だと私は思います。しかも、どのようなことをやっても首が切られることはない。ですから、逆に言うと、それだけに、住民の皆さんがしっかりと皆さんの仕事を見ていることを忘れないでいただきたいと思えます。

今はあまり言いませんが、過去には「公僕」というお話で、住民の模範となる生き方をするのが公務員ということになっておりました。皆さん、そのような自覚はないでしょう。住民の皆さんの模範となるような生き方をするために公務員になったのだという人は、いますか。そのような意気に燃えて。何人かの方はいらっしゃるかもしれませんが、今はあまりそのようなことを言いませんけれども、本来であれば、住民の皆さんをリードしていく、あるいは支えていく。そのような立場ですので、しっかりとした生き方をしていくことは、大事なことではないかと思えます。

今までは姿勢などについて、若干大枠のお話をしましたが、その下の「仕事に対する姿勢」ということで、皆さんの自治体には必ず首長がおりますので、その首長さんがどのようなことを期待しているか、ぜひ聞いてください。なかなか直接聞く機会はないかもしれませんが、私は、首長になってから丸3年が過ぎていきました。今、4年めに入ってきましたけれども、3年間の中で、職員の皆さんにどのようなことを期待するのか、この研修会を機会に考えてみました。ここに書いておきましたが、与えられた仕事さえしていれば、それで別に不可はないのです。ところが、それでは、やはり今の時代は物足りなくなってきた。自分の考えていることや思いを発信して、それを具現化していく。そのような力が、首長としては、どうしても欲しいと思うわけです。それを分析しますと、「発想力」と書いておきました。

小谷村の事例を、せっかくの機会ですから、ご紹介いたします。今日は、小谷村の方はいらっしゃいますか。手を挙げてみて。ああ、来ていました。聞いたことがないと思うので、せっかくの機会なのでお話ししますけれども、小谷村さんは、ふるさと納税で昨年度、三十数億の寄附が集まったのではないのでしょうか。予算規模が40億そこそこですから、寄附で三十数億集まるということは、大変なことです。これが数年続いているわけですが、そのふるさと納税を集めるためにどのように考えたのかということにわれわれは興味があって、村長さんに聞いたのです。そうしたら、ある職員が、モンベルは知っていますか。アウトドアのグッズ販売をしている、アウトドア製品ではトップブランドです。モンベルの会社と提携をして、モンベルの商品券をふるさと納税の返礼品にしたらどうかという提案をしたのです。

小谷村は山の中ですから、アウトドアのスポーツ等がたまに来る。われわれはてっきり、モンベルが小谷村さんと提携をして、スポーツ面でも小谷村さんに行っているいろいろな活動をしているのかなというイメージで、「そういうつながりがあるなら、いいね。よかったね」と話をしていたのですが、いろいろと聞いたら、全く関係がなかったそうです。単に職員の発想で、モンベルはトップブランドだと。ふるさと納税は、返礼品が魅力なので、そこに集まっていくわけですね。ふるさと納税の返礼品にモンベルの商品券を使えば、きっと皆さん喜んでくれるという職員の発想があった。

村長さんはモンベルなど知りませんから、「そんなところがあるのか。じゃあ、やってみろ」ということで、ふるさと納税の返礼品にモンベルの商品券を出した。そうしたところ、

一気に上がってきて、今まで二三千万だったふるさと納税が、翌年から10億を超えてきて、その翌年は20億、それから30億を超えて、うなぎ登りで上がってきた。「今日は何百万寄附がありました」「今日は何百万ありました」と、毎日集計。30億を集めるためには、毎日のように寄附が集まってこなければ、そのようにはなりません。その結果、やりたい事業がどんどんできて、大きな加工施設を造ったようです。

その村長さんいわく、「本当にあの職員の発想には助けられた」と。村長になった時には火の車で、財政破綻寸前だったというのです。ふるさと納税のおかげで救われたと言っておりましたので、多分、実態はそうだったのだろうと思います。そのおかげで財政が立ち直り、今はりっぱにやられているわけです。若干の反動はこれからあると思いますが、それでも、その職員の発想力に対して、賞与を1,000万円やっても全然惜しくない。行政でなければ出るので。民間企業でそのくらいやれば、1,000万くらいの賞与はぼんと出るとは思いますけれども、行政はそのようなわけにいきませんから、あげてもいいくらいアイデアだったということです。

そのように考えますと、われわれにも非常にいろいろな制度があって、難しいのですが、その制度の中で発想していく。飯田市では、かいつまんで言いますと、地域の公民館を建て替えられる制度ができたことがあったのです。その情報を取って、どのように自分の地域に当てはめていくかという発想を、飯田市の職員がした。初年度は、新しく制度ができた時は分からないのです、どのような意味なのか。やはり気がつく職員がいて、それに全て手を挙げたら、公民館が十幾つ新しくなってしまう。全てそっくり建て替えるという制度が一時できて、数年前からは福祉空間何とか事業と名前が難しくなりましたが、その制度がずっと残ってきて、気がついた所が順次手を挙げて、早い者勝ちのようなことで公民館が全て建て替えられてしまったということもありました。私も、分からないながらも制度の深い意味を考えて、ひょっとしたら地域の困っている課題を解決できる制度かもしれないということに気づくかどうかで、大きな違いがあるのだと感じさせていただきました。

いろいろな制度が、次々と国から出てきます。国の制度は速いのです。選挙が近づくと、いわゆるばらまきといって、お金をばらまいて「使ってくれ」と。その制度に食いつくかどうかは、職員の力量にかかっておりますから、このあたりもこれから大いに勉強していただいて、国の制度が変わった時に「これはチャンスだ。地域の課題が解決できるぞ」というところに食いついていくと、自治体の予算外の費用で課題解決ができることにつながっていくのかと思います。

それから、「創造力」と書きました。これは、特産品などでよくありますね。B級グルメなどと言っておりますが、自分で生み出していく。いろいろな地域資源を自分で感じながら、その中から生み出す力。住民の皆さんの力をお借りすることもいいけれども、どのように借りていくか、住民の皆さんの力を引き出すか。これも、行政職員の力量、仕事になってくるとは思います。



そして、実行力。幾ら発想しても、実行しなければ何も役に立ちません。皆さんは新入職員ですけれども、本当は上司が皆さんの発想したことをぱっとつかまえて、「この発想はいいぞ」と上にどんどん上げてくれて、われわれまで来れば、「この発想、いいじゃないか。どうやって具体化する？」という話になるのですが、われわれのところまで来ずに途中で止まってしまうと、その情報が生きないうちに終わってしまう。そのような意味で、大いに発想して、上げていただくことが大事かと思います。

実行力ということで、徳島県の上勝町の葉っぱビジネスは知っていますか。知っている人。ああ、いましたね。私も視察に行ってきましたけれども、ここの話はすごかった。山の中なのです、全くの。沢が1本流れている山間地域の町なので、人口は5,000人そこそこでしょうか。何とかしなければいけないということで、振興課の課長さんが毎日考えた。「どうやればいいんだろう」と。このままでは、この町はどんどん高齢化して行って、潰れてしまう。考えて考えた末に、ある料理屋さんに行ったら、料理の端に紅葉の葉っぱがのっていた。この飾りがあるだけで、非常に料理が引き立つ。よくよくそのようなところに注目してみたら、紅葉ばかりではなくて、その季節、季節の植物の葉がのっている。いろいろな葉っぱで飾られている。もしかしたら、これが商売になるかもしれない。このような葉っぱでよければ、うちの山には、紅葉などたくさん落ちていると。

そのように考えていって、これを商売にできるのであれば、どのようにやればいいのか聞き出そうと、料理屋さんの裏に回って聞こうと思ったけれども、そう簡単にはノウハウを教えませんね。行っても門前払いで、詳しい話は、商売の話ですから、教えてくれない。では、どうしたか。自分がお客になれば、いろいろな情報を出してくれるのではないかと、毎日自腹で料理屋さんを食べ歩いた。毎日のように食べてしまったから、糖尿病になってしまったというのです、太ってしまって。そのくらいに課長さんは毎日食べ歩いて、顔なじみになった料理屋さんで、この葉っぱはどのような所から仕入れているのか、商売になっているのかということから聞き出したら、これが非常に今、評判がいいのだということが発想になって、「じゃあ、うちの山から葉っぱを集めよう」と集め始めた。

そして、少しずつ売り始めたら売れるようになって、今では、お年寄りのもう副業ではない、自分の仕事のようになった。ひところ、80歳のお年寄りの方が、1,000万円稼いだと言いましたから。息子さんが、おばあちゃんに使われている。「おまえ、今日はこれとこれを出荷するよ」と。全てお年寄りのネットワークを使って、「今日は、かえでの葉っぱを100枚出荷したい。出荷できる人？」ということで、手を挙げた所からそれを買付け。そして、翌日には出荷して送る。それが、今、葉っぱビジネスとして大成功して、そのおかげで上勝町は、息を吹き返したということになっています。今はどうかと思いますが、町長さんは、講演をして回っているというくらい引っ張りだこです。

もう一つは、ごみゼロ運動をやったのですね。「焼却場をなくせ」と。皆さんも、興味があったら行ってみればいいと思いますが、三十何種類です、ごみの分別が。この半分ぐらいの部屋に分別の棚があって、本当に細分化されて、生かすものは生かしていく。肥料に

するものは肥料にする。生ごみは、全て肥料。生ごみ自体を仕分けをして、ごみゼロ運動を提唱して、全国に講演をして回っているという町長さんです。その発端は、とにかく焼却場をなくすという、これはやはり首長さんの方針ですね。焼却場を全部やめて、徹底的に分別しなさいという方針のもとで、今、やっているところでございます。大変ユニークな首長さんでしたけれども。要は、実行力、行動力。そのような行動力がなければ、恐らく上勝町も、ここまでは来なかつただろうと思います。

それから、自主性。これは、皆さんにずっとついて回るとは思います、自分から進んであらゆる業務に取り組んでいく。大事な姿勢かと思えます。

時間がありませんので、次に「業務に取り組む行動指針」ということで、ぜひ皆さんに心得てもらいたいことを挙げさせてもらいました。いろいろな仕事をする場合に、「5分前」の気持ち。始業が8時半ですね、皆さんは。8時半ぎりぎりに来て、すぐ席に着いて、定時から仕事ができますか。一般企業もそうですけれども、スーパーやデパートなどで分かるとは思います、オープン前には朝礼が終わって、態勢を整えて、「10 時開店です」といったら一斉に開けて、お客さんがどっと入ってくる。それに対応できるような十分な準備をしているわけです。そのようなことを考えますと、ぎりぎりに行くと、いい仕事ができるわけがないということになりますので、あらゆる職場等では、少なくとも5分前に行くと、心を整えて準備する。そのようなことが大事ではないかと思えます。

それから、その下に「挨拶、返事、後始末」と書きましたけれども、これは忘れてほしくない。挨拶は、第1番めの皆さんが評価される一つの基準です。住民の皆さんの声を聞くと、まず職員の皆さんを見て、「あいつは挨拶してないぜ」「あいつは挨拶ができないな」「こいつは、すごくいい挨拶をするよ」という話があるのです。挨拶のできる職員は、仕事ができる職員と相場は決まっています、住民の皆さんの評価は、全てここに集約されてしまうのです。挨拶のできる職員は、「あいつは仕事ができるぞ」となってしまうのです。地域の懇談会がありますので、行くと、バロメーターは、挨拶や返事ができるとかどうか。これが行政職員を見る住民の目という、しっかりと心得ていただきたいと思えます。

後始末は、仕事の後始末。最終的には報告ということになりますが、とにかく一つの仕事が片づいたら、1日が片づいたら、机の上の整理・整頓。その下に「5S」と書いておきました。あまり行政では5Sと言いませんけれども、生産性を求める工場などでは、絶対的に5Sを徹底しようと。整理、整頓、清掃、清潔、しつけ。これを徹底しないと、生産性が上がらないということです。皆さんは生産性を求める職場ではないと言いましたが、仕事の生産性は、常に求めなければならない。同じ10の仕事をするために、どのくらいの時間をかけるか。これが生産性ですね。10の仕事をするために12かけてやる人と、8でやる人と、おのずから仕事の成果は違ってきますし、スピードが違ってきます。

常に仕事の生産性を意識しながら、そうでなければ、毎日残業をしてやらざるをえないことになるわけです。働き方改革を何のためにやるかということ、「生産性を上げなさい」ということです。定時で仕事が収まれば、それで帰ればいいわけです。しかし、収まらない

から、残業をせざるをえない。いろいろな事情がありますし、残業しないことばかりがいいことではないのですが、仕事の生産性を上げていくことは、人生の中のどのような場においても絶対的な課題ですから、常に意識して取り組んでもらいたいと思います。

先ほどは挨拶と返事と言いましたが、「机の上を見れば仕事ぶりが分かる」と、一般企業ではすぐに言われます。机の上を見れば、その人の仕事ぶりが分かる。この人はできるかどうか。皆さんにしてみれば、常に整理・整頓、きちんと整理されていて、必要な情報がすぐ出てくる。一つの情報を、上司から言われて、いかに早く出せるか。そのようなことも、仕事の力と測られてしまうと思います。そのためには、常に整理・整頓。これは身の回りばかりではなくて、頭の中も。当然、身の回りが整理・整頓できていなければ、頭の中はぐちゃぐちゃです。机の上がぐちゃぐちゃな人は、頭の中もぐちゃぐちゃだから、仕事の優先順位がつけられない。自分が本当にやらなければならないことが的確に捉えられないものだから、タイムリーな仕事ができないということです。身の回りの環境も見られることによって、見られてしまうということも、知ってもらいたいと思います。5Sは、これから職業人としてやっていく上でも、絶対に不可欠な要素です。常に整理・整頓、そして、清掃、身の回りの清潔を心掛ける。そのようなことに取り組んでいただきたいと思っています。

それから、「報・連・相」。常にうるさく言われておりますが、本当の意味がどこにあるのか、皆さん分かっていると思います。情報を共有することは非常に大事なことで、先ほどお話ししましたが、われわれまで全て情報が共有されれば、恐らくほとんどの問題は、大きな問題にならないうちに処理ができたと思うのです。ところが、途中で止まって、われわれに来ない。それが、蓋を開けたら、非常に大きな問題になっている。

今、恐らくどこの自治体でも、裁判を抱えていないところはないと思いますが、うちの町でも裁判を抱えております。ごみを出す集積所が遠い。「これは不公平じゃないか」ということから始まって、文句を言われて裁判。今の住民の皆さんは、そうなのです。ただ、突き詰めていくと、最初の初期対応がどうだったのか。そっけなく職員が、「これは決め事ですから、だめですよ。できませんよ」というような対応をすると、住民の皆さんは敏感に感じます。

今の住民の皆さんは、黙っていないという非常に素晴らしい面を持っているわけです。特に行政の不始末は黙っていませんから、必ず言ってきます。直接電話で来る場合もありますので、本当に困ると思うのですけれども、最初にそのような問題があった時に、自分たちで判断するのではなくて、「どうしましょうか」と上司に話をする。上司が、また上に持ってくる。われわれのところまで来れば、「ちょっと待て」と。その人にもよるわけですが、「あまりこじらせると、こういうタイプの人はやばい。すぐ行こう」ということで、私が直接すぐに行ったケースもあるわけです。行けば、それで収まるケースもあるのですが、ぐずぐずしていると、だんだん感情がこじれてきて、裁判で決着をする。

今、本当に困ってしまっていることは、弁護士が仲介に入りますが、それでは気が済

まない。「裁判で判定をしてくれ」ということです。そうなると、自治体は困ってしまうのですね。裁判でNGが出ると、「近くに集積所を作りなさい」。では、回収車をどれだけ回したらいいのか。あちらこちらでそのような問題が起こったら、回収車が幾らあっても足りないことになってしまうわけです。そのようなことを考えますと、初期にぱっと対応して、大きくならないうちに収めていく。これは、報告・連絡・相談ということになるわけですから、このあたりもしっかりと身につけていただきたいと思います。

その下は、首長の公約。これは池田町の方針ですが、「美しいまちづくり」をコンセプトに町政をやっております。「美しい」という基準を持って全てを見てみましょう。皆さんの行動、言葉遣い、姿勢。果たして美しいだろうか、自分の今、取っている行動が。そのようなことを基準に持っていくと、冷静に考えれば「ちょっとこれはまずいんじゃないの」ということになってくるわけです。これは当然、景観が美しい、環境が美しいというところにも通じますが、全ての施策を「美しい」を基準に考えていきたいと思います。今、池田町で進めているところです。そのようにやると、今度は住民から、「こんなに汚れていていいのか」「空き家が醜い。こんな状態にしておいていいのか」などと、どんどんクレームが来ます。一つ一つそれに対応していくことが大事なことです。大いにそのような話があるということは、ありがたいと思います。首長さんの方針をしっかりと受け止めていただいて、その方針に基づいて進めていく。

あと1分になりました。最後に、親への感謝。人や物に感謝できるかどうかは、親に感謝できるかどうかで全てが決まるといわれております。皆さんは、あまり親などということ言われなと思います。人に対する感謝がなければ、これから住民と接しても、なかなかうまくいきません。そのような点で、ぜひ初めて頂く給料で何かご両親にプレゼントをして、「ありがとうございます」と言葉を添えていただけたら、ありがたいと思います。そうすることによって、職場に対する感謝、いろいろなものに対する感謝の気持ちが生まれることだろうと思います。

そのようなことで、私の時間が終わりましたので、本当にしっかりと聞いていただきまして、ありがとうございました。聞いただけでは役に立ちませんので、これを胸に落とし、一つでも二つでもこれから身につけていただけたら、幸いかと思います。本当に今日は、ありがとうございました。